

東予推進ブロック 研究報告

今治市立上朝小学校、下朝小学校、朝倉中学校

1 取組の内容

(1) コミュニケーション能力育成のための指導の在り方の研究

ア 導入の工夫

- ・ コミュニケーションの基本となる挨拶
- ・ 見通しをもたせるための課題の提示
- ・ 場の設定の工夫
- ・ つなぎ言葉の活用

イ H R T ・ J T E ・ A L T の関わり

- ・ 事前ミーティング
- ・ 複数の指導者で組み立てる授業づくり

ウ 児童生徒間の関わり

- ・ クイズやゲームを取り入れた体験活動
- ・ ペア学習による活動

(2) 評価の在り方の研究

ア 振り返りシートの活用

イ リフレクションシートの活用

(3) 小・中連携カリキュラムの研究

ア 外国語活動・英語科の単元系統表の作成

イ 英語コミュニケーション能力育成のための指導のポイントの作成

ウ 小中交流活動

エ 小学校間交流活動

2 成果と課題

(1) コミュニケーション能力育成のための指導の在り方の研究

- 導入では、授業の始めの挨拶を工夫したり、見通しをもった課題を提示したり、関心や意欲を高める場を設定したりすることで、児童生徒のコミュニケーションを取ろうとする意欲が高まった。
- H R T と J E T は F A X などを使って、H R T と A L T はミーティングの時間を設定し、授業の進め方や内容などを決め、指導方法の共通化を図った。
- 教師の役割分担を明確にし、それぞれの特性を生かした T T 指導をすることにより、スムーズな授業を展開することができた。また、教師が児童生徒一人一人の思いに寄り添う支援ができ、児童生徒は自分の思いを自信をもって表現できるようになってきた。
- 合同授業を行うことで、児童生徒たちは相手意識をもったコミュニケーションをとることができるようになってきた。また、教師は互いの連携を図り、よりよい指導・支援ができるように全員で教材研究ができた。
- 中学校の英語科教師が出前授業で小学校の外国語活動の授業に参加することで、正確な発音やアクセントの仕方についての指導ができ、小学校の外国語活動が充実

した。

- 児童生徒間の関わりでは、クイズやゲームを取り入れたり、楽しいペア活動を工夫したりすることで、互いに教え合う場面が見られるようになった。
- 導入では、マンネリ化しないよう、児童生徒の興味・関心がわくような生活に密着した場の設定や活用の工夫が必要である。
- 小学校で使用している「つなぎ言葉」の活用を中学校でも継続し、温かい雰囲気の中で学習できるよう大切にしていきたい。
- 教師間の関わりでは、直接話す時間が取りにくいいため、事前のミーティングをFAXなどを使って行ってきたが、細かな打合せができにくい。学校間の調整を行い、時間確保をしていきたい。

(2) 評価の在り方の研究

- 評価では、振り返りシートやリフレクションシートを活用することで、一人一人の見取りや指導の定着度が把握でき、次時の指導に役立った。
- 評価の在り方については、振り返りシートやリフレクションシートを継続して実施し、それらを蓄積・分析して、どのように生かしていけばよいか研究する必要がある。
- 振り返りシートの内容や書かせる時間の設定などを工夫していかなければならない。

(3) 小・中連携カリキュラムの研究

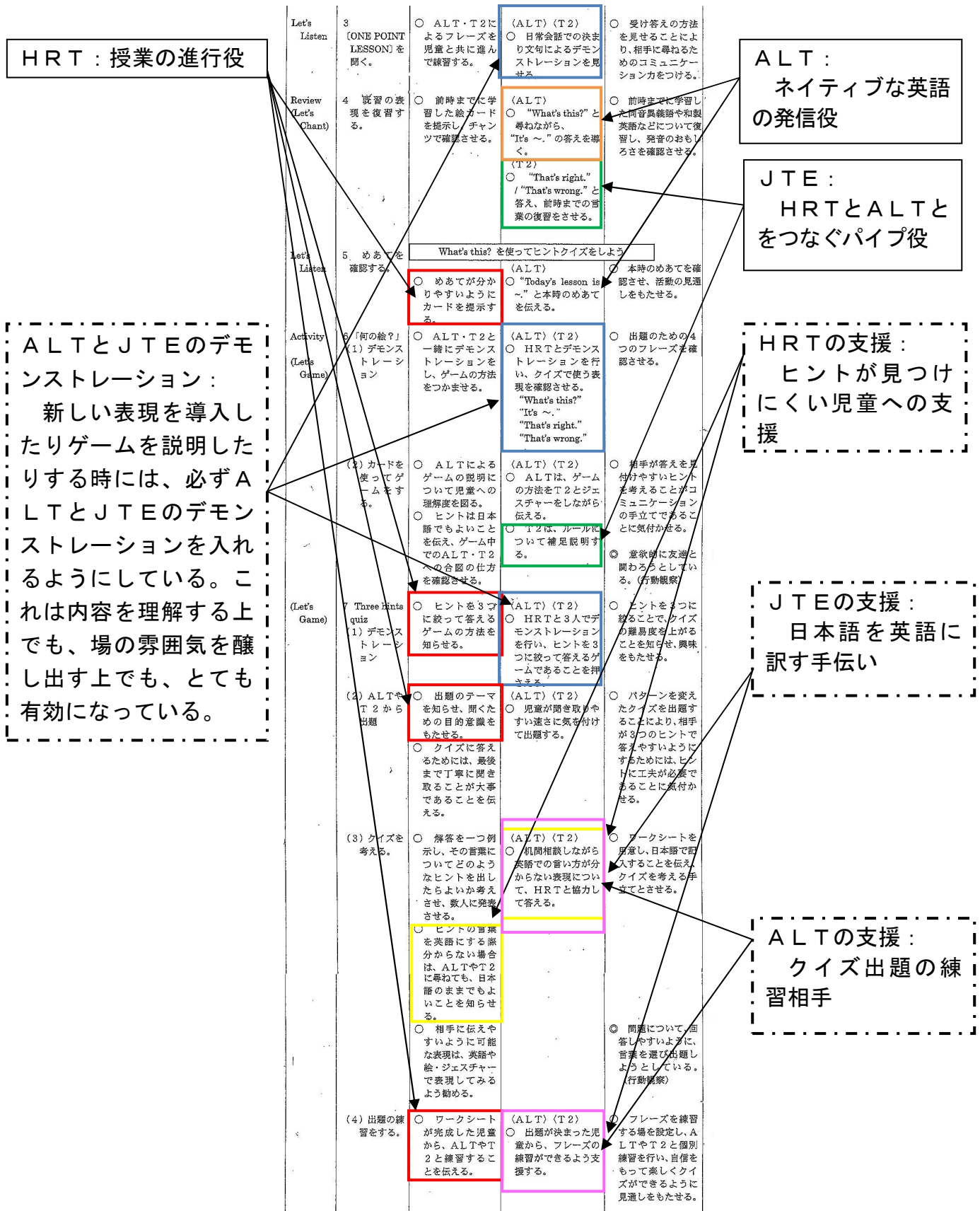
- 外国語活動・英語科単元系統表（小中）や英語コミュニケーション能力育成のための指導のポイント（小）を作成することで、小学校と中学校教師が共通意識をもって、授業に取り組むことができた。
- 様々な交流活動や小中合同授業などの異質体験を行うことにより、相手を意識したコミュニケーションを心掛け、互いのよさを知ることができた。
- 交流活動では、距離や時間的な制約があり、多くの時間を割くことができないのが現状である。今後「つながり」を意識した交流活動を充実していくためには、コミュニケーション能力育成を目指した活動の精選と内容の充実を図る必要がある。

3 成果のあった取組事例

(1) 複数の指導者で組み立てる授業づくり

複数の指導者の特性を生かしたTT指導ができるように役割分担を行い、授業中の一つ一つの活動場面において、誰がどういう形で児童に関わるかを確認し合って授業を行った。

ア 小学校第5学年『What's this?』での事例



イ 小中合同授業（小学校第6学年と中学校第1学年）の実施

指導案の作成に当たっては、慣れ親しむことをねらいとする小学校と、英語コミュニケーション能力の基礎を養う中学校の、それぞれの指導のねらいを明記することで、教師の意識統一を図った。展開は、中学校の教師が指導の中心となり、小学校の教師がそれにどのように関わるか役割分担を明確にした。教師の指導・支援の仕方がよく分かるように工夫した。

合同授業を実施しての成果として、中学生の様子を見た小学生が「すごいな、もっと勉強しよう。」という中学校英語学習へのあこがれの気持ちを抱いたり、中学生が「小学生がこんなにできるのだったらもっと頑張ろう。」という気持ちをもったりするなど、学習への動機付けを図ることができた。また、教師は系統表からでは分かりにくい教科としての英語科に外国語活動がどのようにつながっていくかを理解することができた。